
meis-mois

meri

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m e i s - m o i s

【Nコード】

N 2 4 1 2 B A

【作者名】

m e r i

【あらすじ】

およそ1万円でも仕事を請け負う、つまり良いことも悪いこととして人の役に立つ、不思議な力を持った、人ならざる13人の集団のお話。

暴力的で残酷的な描写があり、いじめ・複雑な家庭環境・恋人関係の纏れなど、なんでも出て来ます。一応ほのぼのしていますが、基本暗め。苦手な方はご注意ください。

人と世界の紹介（前書き）

簡単な meiss-mois の紹介です。

人と世界の紹介

meis - mois (メイス「モウ」)

舞台となる国の首都・トレーズ13区郊外にある大きな屋敷に住んでいる集団。

探偵とも、秘密結社とも、大家族とも。

金さえ払えばなんでもする。その金も一回につきその国の最高額100ヤール紙幣一枚。

顔を見た者はいるが、メンバーは何年も容姿が変わらないという噂が実しやかに囁かれている。

メンバーは原則二人ないし三人行動。

^{ノル}
noll (30)

meis - moisの創設者にしてボス。性別不詳。仕事で書斎に引き籠っている。

^{ジャンヴィエ}
janvier (17)

男。法という法を犯しまくる問題児。仕事上のパートナーはアヴリル。

^{ヘルミク}
heimiku (22)

女。特技はハニートラップ。お酒と年下の女の子が好きな姉御。仕事上のパートナーはマーシュ。

^{マーシュ}
mars (17)

男。ジャンヴィエ曰く「顔面で得してる」美少年。メンバーのスケジュール管理を任されている。銃や火器に精通している。

アヴリル
avril (22)

女。猪突猛進な怪力娘。家事全般が得意。

マイウス
Maïus (25)

中性的な男。聖者のような生真面目で誠実な人。時間を渡る能力を持つ。

ユニ
juni (24)

女。マイウスと仕事をこなす相棒。ステッキと分厚い法律の本が手放せない。機敏。

ユリ
juli (27)

男。寡黙な縁の下の力持ち。五感に優れ、言霊の力を持つ。家事から日曜大工までなんでもこなすお父さんキャラ。仕事上のパートナーはウット。

ウット
auto (16)

男。見た目は一番年下だが、一番偉そう。好きな言葉は「喧嘩両成敗」

シユースク
syysukuu (19)

男。ラッキボーイ。霊感が強い。痛覚がなく、体の破損等で死に至ることはない。しかし本人はスプラッタ物は苦手。ジャンヴィエとウットと仲良し。マイウスとユニと仕事をするが多いが、本人は性格の不一致から不服らしい。

シオン
sion (20)

女。戦いは苦手。治癒能力があり、能力上シユースクやリオンと行動することが多い。

リオン
R i o n (2 0)

男。メイス〃モワ切つての破壊神。攻撃を一手に引き寄せ、本人も不死身の体を持つが、シユースクと違い痛覚は健在なので、シオンがいなけりゃさあ大変。

デオン
D e o n (2 0)

男。自室で日々を過ごす引き籠り。ノルさえも特別視する、異質な存在。

とある国の首都・トレーズ。その13区の郊外にある古びた洋館。人を拒むように閉ざされた門は錆びていて、自生していたと思しき蔦が門や外壁を覆う。この家の噂を聞き付けたのか、その門に設置されたポストからは手紙が溢れ出ていた。これは人のいない屋敷ポストに長年蓄積されたものではない。ここ一週間の内に、夜ないし早朝の人目につかない時間帯に、人々が自らここへ入れるのだ。

「100ヤール札一枚をご依頼書と共に同封下さい。成功報酬はほんのお気持ちで結構です。紙切れ一枚で腐りきったあなた様の世界を変えて下さいまし」

ラミネートされた何の変哲もない一枚の紙が、蔦に巻き付けられてそこにある。まるでこの家の住人がこれを商売にしているようだ。これとその溢れ返ったポストを見て、依頼内容を書いた手紙と金を持参した人は、噂は本当なのだと確信する。

そしてこの深夜にも一人、息を切らし思い詰めた様子で、すでにキヤパシテイの超えたポストに大事そうに握り締めくしゃくしゃになった封筒を押し込んだ。

「そばかすのニールが来たぜ。今日も暗い顔してんな」

「昨日見たホラー映画に出て来たあいつみたいな奴があっさり殺さ

れてたよ」

「あー、あいつって真っ先に殺されそう。蟻みてーだもんな。根暗だし、何言ってるのかわかんねーし、きもいし」

朝、いつものように登校し教室に入って、「おはよう」と誰からも声をかけられず開口一番がこれ。本人にわざと聞こえるように、教室の片隅の机に我が物顔で座る三人組。

そこは僕の席なのに……。言いたくても言えない言葉をニールは飲み込んで、彼らと目を合わせることなく机のフックに鞆をかけた。そうすることで彼らはいつも「根暗がうつる」と楽しそうに逃げて行くのだ。

ニール・アルフォード、17歳。この学校の二年生。所謂いじめられっ子で、成績は良いものの引っ込み思案な性格と、幼い頃からの視力の低下による分厚い眼鏡とそばかすにより、苛めの対象とされている。

中高一貫のこの学校で彼はこれに四年間も耐えて来たが、遂に限界に達した。というのも、教師に相談しても彼らはいじめっ子に注意こそしても、当人らがそれを否定してしまえばそこまでであり、教職員を目指すニールはそれに幻滅した。

体を張って庇ってくれた小学生時代の恩師のような教師ばかりではなかったのだ。

「今に見てる……」

殴られて腫れの引かない痣だらけの顔で、ニールは怒りに震える。彼の手元には印刷済みのコピー用紙が一枚。

噂を聞き付け三ヶ月。中々踏ん切りがつかなかったが、その教師の対応でこの先の安息を望めなくなったニールは、アルバイトで貯めていたお金を手に、先日あの郊外の洋館へ向かった。

最初は怖かった。依頼文を書いた時は感情任せだったとしても、夜中にあの古びた洋館に赴くのはホラーもサスペンスも苦手なニールには至難の業で、そこでようやく頭が冷静に働いたからだ。

この依頼文には住所や氏名を書かなければいけないと、インターネットの裏サイトにはあった。もしも、犯罪者予備軍として警察に通報されてしまったらどうしよう。成功したと書き込んでいた人たちもサクラだったら？

しかし、あの洋館を調べれば調べるほど、古くからその噂はあったことを知った。それこそ祖父母の代よりも、もつと昔だ。褪せることのない門前の案内文。一体誰が住んでいるのか、住民票に登録もなく書類上は空き家らしい。その不気味さが逆に真実味を増した。

「お前たちも近い内に、ぼくと同じ目に遭うんだ」

ただの復讐心からきた少年の叫び声を受け取った男は、似たような文章が記された手紙の多さに、少し微笑ましげになる。彼の心中なんて全く察していなかった。

「またこの手の依頼ですか。多いな、いじめっ子への復讐っていうのは」

封蝋まできちりとされた手紙を読み、ノルは大きな溜め息を吐く。これまで何度こないじめっ子への復讐を請け負ってきただろうか。

実際には彼ではなくその手足となって働く12人・・・、否11人の人たちののだが。

つまらなさそうに羊皮紙の手紙を摘まみ、脱力してやや猫背になり、一応文面に目を通す。住所からしてこの街の3区に住む17歳の少年、ニール・アルフォード。

癖のない書体からして頭の良さそうな子だ。

「なるほど。大方、容姿か頭の良さを妬まれて悪質ないじめに長年遭ってる幸薄な少年、と言ったところでしょう。お馬鹿さんですねえ・・・」

やれやれ、と机の上にあるアンティーク調の電話の受話器を上げた。もう何百年も買い換えていないのに、故障することなく動いてくれるこの電話の作り手はさぞかし優秀な職人だったのだろう。

まあ買い手のノルも今となつてはどんな店で買ったのかすら覚えていないが。

「ああ、ジャンヴィエですか？・・・ええ、お仕事ですよ。アヴリルと一緒に書斎に来て下さいな」

この電話は屋敷内専用。つまり内線専門の電話。各メンバーの自室にある固定電話とそれぞれ繋がっている。

受話器を元の位置に戻すとちん、と軽い小さな音を立てる。そこではた、とノルは思い出した。

「ああコッチで買ったものではないですね、そういえば。マイヤが下さったものでしたっけ・・・？あれ、ユノでしたっけ？・・・嫌ですね、年は取りたくない」

ムコウの女からの贈り物。それだけは覚えている。

コッチへ来る時に選別にと貰ったもの。道理で壊れることなく動くはずだ。よくよく考えると電話線も繋がってはいない。

もう自分が何歳かも覚えていない。途方もない時間を生きている。

ごろんと書斎の大きなウッドデスクに突っ伏し、日当たりの良いその場所で「加齢やだ」と呟いた。

長い髪がさらさらと肌を撫でて落ちてきて、最近変えたシャンプーの匂いが鼻腔を擽る。あれは失敗だった。CMで大々的にフローラルの香りを謳ってるくせに、これじゃ香水を被った方がマシとさえ思っほどの悪臭。

「本当、人って節度を知りませんねえ・・・」

やだやだ。

昼下がりの陽気な日差し。人間は節度を知らなくても自然は今この時期に丁度良い日差しの強さを知っている。

ジャンヴィエとアヴリルが来るまで一眠りしようか。故郷に似た日差しの中で。

自分たちのような存在に睡眠も食事も必要ない。ただコチラでの生活があまりに長くなった所為で、空腹を苦痛と感じてしまうのは予想外だった。

時にはうたた寝をしたい時だったある。今日のような日差しが穏やかな日には、埃っぽい書斎に籠るより、窓を開けっ放しにして新鮮な空気を取り込んで、目の前に広がる中庭で横になりたい。

以前それをしていたら、マーシュに「依頼書が飛んで行ったらどうする」とこっ酷く叱られた。個人情報管理法・・・、また人間がそんな面倒な法律を作ったと朝刊で目にした。

法律なんて守らなかつたからと言って裁かれることもないのに、この住人たちは一人を除きやけに法を尊重する人間臭い連中になってしまった。

育て方を間違えましたかね・・・。

夢の中で呟いた気がして、がつんと頭の上に重たい何かが落ちて来た。頭上への落下物とそれにより顎が机にめり込みそうなほどの衝撃のダブルパンチ。

「おっさん、人呼び出しておいて昼寝か？」

「ちょっとジャンヴィエ、ノルになんてこと・・・！」

この憎たらしい声とそれを咎めるおどおどした声。最近よく仕事を流すのでいくらまどろんでいても聞き間違えるはずがない。

睡眠の為に外していた大きな黒縁の眼鏡を掛け、ノルは眉間に皺を寄せ一分と“待て”の出来ない青年、ジャンヴィエに呆れたように溜め息を吐いた。

彼の手にはこの部屋の本棚にある分厚い生物図鑑。あれを容赦なく落としたのだから、頭蓋を割る気かと静かな怒りが湧く。

「こんなに早く来るとは思いませんでした。思いの外、早くジャンが捕まっただんですね、アヴリル」

「あ、いえ今日は

「は？ 違いよ。俺がアヴリル捕まえたんだよ。こいつユーリと家庭菜園なんか始めてっから。その所為でマーシュが裏庭に耕運機持ち込んでんだけど」

「ああ、あれですか。自給自足がしたいと言うので私が許可しました」

「やかましいんだよ、お前から辞めさせろ」

今更何を言い出すのか。もう一週間以上も前から、マーシュが異国から仕入れた農作業機を意気揚々と使っているのは、この屋敷では周知のこと。

ずいっと身を乗り出して抗議するジャンヴィエを不審に思い、「また女のところか」とノルは腹の中で再度溜め息を吐く。

「品行方正なマーシュと歩く煩惱のあなたとでは話になりませんよ、ジャンヴィエ。無断外泊は許しませんとあれほど言っただろう」

怒った時にややその目の色を濃くするノル。その変化をすぐさま見

抜いた、説教部屋常連のジャンヴィエは、まだ何も言っていないのに、そこまではれていることに露骨に肩を震わせた。

自室の窓から「煩い」と怒鳴った後、耕運機の上から勝ち誇ったように鼻で笑ったマーシュのシュールな図が脳裏を過り、それが余計にジャンヴィエに地団太を踏ませている。

「あー！マジでむかつく！てめえあいつが深夜3時に俺の部屋の壁をダンダン叩いて睡眠妨害してんの知らねえーだろ！普通の奴なら逃げるべ、女のとこに！」

「あなたの酈がうるさいとマーシュが不眠症だったので私が提案しました。それとジャンヴィエ」

「あゝ あ！？」

「それ以上喧しくするとお嬢さんに行けない体にしますよ」

ずっと椅子から立ち上がり、その高い頭の位置からジャンヴィエをどす黒い顔で見下ろす。本気だろう。

お嬢さんに行けない体とは如何ほどのことが不明だが、ただならぬ物を感じたジャンヴィエは途端に大人しくなり、「お座りなさい」とノルに言われるまま、いつも仕事の話をする時に使うソファアにすでに腰を落ち着けていたアヴリルの隣に、身を縮込ませて落ち着いた。

向かいには「お待たせしました」とアヴリルに一言断り、二枚の紙を持ってノルが座る。柔らかなソファアが彼の体重で沈んで端が皺になった。ずっといつものようにテーブルに差し出された書類。そこに並ぶ、ノルが要点のみを押さえた文章に二人は視線を落とす。

「この近くのハイスクールの生徒でしょう。悪質ないじめに遭って

いるようなので、それを排除してほしい、と」

すぐに仕事内容の大まかな部分は察したのか、ジャンヴィエの眼の色が変わった。彼はすぐに書類に手を取り、その“方法”を探しているのかぎよろぎよると忙しく二つの眼球が泳ぐ。

年齢からして、このジャンヴィエくらいの少年だ。まあ彼の実年齢云々の話は隅に追いやり、ノルは情が移ってしまったのか「惨い話だ」と嘆く。

「いつの時代も、人はこんなことばかりですね。地球上でもっとも賢いなんて持て囃されながら、何一つ学習しない」

「言えてます。もう何世紀もこの手の依頼は受けてきた。尤も、手を下したのはあなた方ですけどね」

落ち着き払ったアヴリルは軽蔑するかのようにテーブルの上の書類を見下ろし、拳を二三回鳴らす。先ほどのジャンヴィエとの口論でお疲れ気味のノルはソファーに身を沈めそれに答えた。

じつと書類にがつついていたジャンヴィエもようやく全て読み終えたのかそれをくしゃくしゃにして壁際のダストボックスへ投げ込む。

「だから俺とアヴリル呼んだのか」

「ええ。適任でしょう?」

「ここまでくると嫌がらせの部類だな」

「あなたは本当に被害妄想が多い。マーシユの件なら後から私が言っておきますから、大人しく働いて来なさい」

言えば、どんっとテーブルが強く叩かれその拍子にすつと目の前の人影が立ち上がった。今度はジャンヴィエがノルを見下している。子どものように、真面目に怒った時もすぐに表情に出る、わかり易い子だ。

言い過ぎたとはノルも思っていない。それが自分の仕事であり、これに異を唱えるのならいくら可愛げのない可愛いジャンヴィエと言えど、説教部屋ではなく折檻までグレードを上げなくてはいけない。

「あなたの言いたいことはわかります。ですが適者です。それがこのルールです。アヴリル、あなただけでも遂行なさい」

「もちろんです」

「ジャン？返事をなさい」

割り切って仕事を承諾したアヴリルと違い、ジャンヴィエの声は聞こえない。これがなければ自らに逆らう者と認めなくてはいけない。ちらつと前髪の間隙から覗き見ると、ジャンヴィエは何とも言えない顔をしていた。

悔しそうな腹立たしそうな。この子が人として生きていたなら、間違いなくこのニール少年を違う意味で救えただろう。

そんな仮のことを思っても仕方がない。手の焼ける子にノルも立ち上がり、床と睨み合うジャンヴィエの頭を軽く叩いた。

「返事を、しなさい」

「.....」

「ジャンヴィエ、私に逆らうのか」

ほんの少しだけ、自らの権力を示威するかのように穏やかなはずの
声が低く唸る。これで尚、逆らうことを選択をするほど、ジャンヴ
イエも正真正銘の馬鹿ではない。

「わかった……。やりや良いんだろ、やりや」

「ええ、そうです。やれば良いんです」

いつもノルは革の手袋をしている。だからこの人の温度を知らない。
何度も自分を慰めるように頭の上に優しく降って来るその無機質な
ものに、ジャンヴィエはまた虚しさを募らせた。

「まだ気乗りしないの？ジャンヴィエ」

「んなことねーよ。超やる気満々だから」

その日の日付が変わろうかという夜更け。二人は夜特有の賑わいを見せる路地にいた。手元の携帯のディスプレイを見て、アヴリルはそれを閉じポケットに押し込んだ。

「毎週末ターゲット三人はこの近くのパブを出て、ここを通り自宅へ帰る。待ち伏せていれば、いつか来るでしょ」

「すげーな。俺そんなことまで調べる気にならなかったわ」

「ヘルミクの情報よ。高くついたんだから、後で覚えてなさいよ」

「へいへい。買い物くらいは付き合ってやるよ」

女って面倒臭い。特にアヴリルのように賢い年上の女は。路地の汚い壁に凭れることも厭わず、ジャンヴィエは一服しようかとパーカのポケットを漁った。

瞬間「来た」とアヴリルの短い小声がする。最悪のタイミングだとばかりに大きな舌打ちをして、路地の繁華街の方から気分良くやって来る三人組を見た。

大柄な少年と二人の取り巻きと言ったところ。依頼書に同封されて

いた写真の三人組と同じだ。仕事内容を記したノルお手製の書類に彼らへの仕打ちが事細かに書かれていた。ニール少年には余程の憎悪があるのだろう。

「始めっか」

「ええ」

アヴリルの同意を確認して、ジャンヴィエはチョーカーについた一つのボタンを押した。如何なる時も外してはならないと、幼い頃ノルに渡されたものだ。何の意味があるのかは知らない。ジャンヴィエが女の所にいることをノルが知らない時もあつたので、発信器や盗聴器の類ではないのだろう。

そして仕事を行う時はこのスイッチを入れなさいとも、きつく言われている。別に劇的に力が増すわけでもない。何も体に変化はないが、ノルは仕事後いつもチョーカーを提出しろと言うので何か意味はあるんだろう。

難しいことはわからないな。

ジャンヴィエは物悲しそうにそう思い、拳の骨を数回鳴らす。

「なんだ？」

「俺らになんか用か？」

通り道に立ち塞がる二人に、彼らは酒の力を手伝ってか、それとも普段からこんな王様気取りなのかは知らないが、初対面の相手に随分態度がでかい。

リーダー格の少年は重たそうな体を揺すって、ジャンヴィエを下から覗き込んだ。典型的な金持ちのどら息子。以前何かのドラマで見

た登場人物にそっくりだと思った。

「ああ。ニール・アルフォードの依頼でお前たちを殺害に来た、メイスⅡモワだ」

「こちらも成功報酬がかかっています。大人しく殺されてちょうだい」

少年らがぼかんとするのも無理はない。メイスⅡモワを知っている人々なら、そんなものが本当実在したのかと驚いているのか。あるいは冴えない少年ニールが、自分たちのことを誰かに告げ口した彼の度量に驚いているのか。

「メイスⅡモワって都市伝説だろ？ 適当なこと言つなよ」

「ニールがお前らに俺たちのことチクったんだろ。いくら貰ったんだよ。それ以上払ってやるから帰れよ」

取り巻きの二人がへらへら笑いながら前へ出て来た。大抵名乗っても信じてもらえないが「名を名乗ることは大事ですよ」とあのすかしたボスが言うので仕方ない。

財布を取り出し、100ヤール札を何枚か取り出した少年。「本当のメイスⅡモワなら100ヤール札一枚だけしかもらってないだろ」と数枚の札をちらつかせる。

ぷつんと頭の中の何かが切れる音がした。

次の瞬間、その少年は路地の壁と一体化していた。人だっただけ。今までそこにいたはずの友人が血と肉だけになって原形を留めていない。

ゆらつと顔を上げたジャンヴィエの姿は悪魔に見えたことだろう。

「ヒッ」とリーダー格の少年は怯えたように小さな悲鳴を漏らし、腰を抜かしたようだ。

その後ろでは取り巻きの一人が泣き声を上げて、ふらふらと覚束ない足取りで逃げて行く。

「ジャンヴィエ、方法が依頼内容に反してるわ。気を付けなさい」

「わかってっけど、こうまでやらねーと信じねーだろ、この餓鬼共は」

「まあ、それもそうね。逃げた1人は私が追いましょう。こちらを頼んでも？」

「ああ、さつさと行け」

アヴリルにはこの依頼を完遂する義務だけでなく、ノルからジャンヴィエの監視も任されている。この様子を見る限り、やることはやってくるようだ。

手のかかる問題児に小さく溜め息を吐いて、彼女は人とは思えない脚力で逃げた少年を追う。

「依頼にあった殺害方法は、撲殺。俺の得意分野だ、餓鬼。相当恨まれてんな、あいつに」

「ま、待てっ！俺は何もしてないっ、あの二人が勝手に・・・」

「いじめ現場の実情なんざ俺にはどうだって良いんだよ。ただ依頼に三人を殺せってあったんだからそうするだけだ。悪いな」

拳を振り上げたジャンヴィエは笑っていた。怯える、でっぷりとし

た少年に拳を振り降ろしても、ニツと口角を吊り上げ白い歯を見せ
て、楽しそうに笑っていた。

命乞いの声、ただの悲鳴、ぐしゃぐしゃと鳴るなにかの衝撃音。返
り血で染まったかのような目は真っ赤になっていて、ジャンヴィエ
の気は昂っていた。

彼はいつもこうだ。人の悲鳴ではなく、今この全ての条件が揃っ
た状況に、女を抱く時のような興奮を覚える。

「死ねよ、さつさと死ねよ。お前は俺の煙草代くらいにしかならね
えーんだよ！」

「ジャン、もう死んでるわ。ミッションコンプリートよ」

ジャンヴィエと同じように、服や肌に戻り血をこびり付かせたアヴ
リルは血が滴る汚れた手で、ジャンヴィエの腕を掴みそれを告げる。
子どものような、何かを奪われた喪失と絶望の色がジャンヴィエの
表情に映える。アヴリルは仕事が終わったことでジャンヴィエのチ
ョーカーのボタンをもう一度押した。

「帰りましょう。長居は無用よ」

「・・・ああ」

アヴリルは立ち上がったジャンヴィエに何かを渡した。これもいつ
も仕事で組んでいる二人の常習的なやり取りで、ジャンヴィエは何
も言わずそれを受け取り、煙草が入っているのとは別のポケットに
壊さないようにそつと入れた。

その無残な塊は翌朝になって発見されたが、彼らの身元が判明した

のは三日後のこと。家出をしたと思われ搜索願が出ていた不良少年の身元は、その服装と僅かに残る髪から両親によって確認されたそうだ。

清々しい朝。鎧戸を開け、まだ強くない日差しと澄んだ風を部屋に取り入れ、窓枠に凭れたままノルは煙草を吹かした。昨日の夜もこの書斎のソファで眠った。

一応寝室は別にあるが、そこまで這って行かなければならないほど、眠りに堕ちる時の彼は極限状態に達している。

一日中珈琲を飲みながら、一人ではとても読み切れない依頼文に目を通さなくてはならず、眠らずにそれを行う日もある。不眠だからと言って特に体に異常をきたすことはないのだが、それでも眠気や空腹はやって来る。「面倒な体だ」と煙で輪っかを作り、雲一つない空に吐き出した。

「ノル、おはようございます」

「ああ、おはよう、アヴリル。昨日の報告ですか？」

「はい。入っても宜しいですか？」

「ええ、どうぞ」

彼らのほとんどはノックをしない。ノルの睡眠を妨げないようにと気を遣っているのだろう。それを知った時はノルは親心から涙したものだ。

いつもの決まった二三のやり取りの後、「失礼します」と一声かけ、アヴリルが入って来た。風が廊下まで吹き抜け、積み上げていた未読の手紙が舞い上がり、部屋中に散乱する。

「また、マーシュに怒られますよ」

「後で拾っておくから大丈夫です。彼には内緒にしていして下さいね」

嫌煙家のアヴリルに「火を消して下さい」と言われる前に、凶器にすらなりそうな厚い硝子の灰皿に、まだ随分残っている煙草を押し付ける。

肺の中に取り込んでいた煙も全て外に吐き出し、窓を閉めた。ことごと小さな音を立ててアヴリルはノルがいつもいる机にチャーカーを差し出す。

迷子タグかのように「j a n v i e」と彫られたプレートが付くそれを見て、本人ではなくアヴリルがこれを持って来たことに、ノルは訝しげに眉を顰める。そして時間差で、彼女は二枚の報告書を提出した。

一枚は癖のない字、もう一枚はミミズの這った後のような字。後者は読む気にもならない。

「あの子は、碌に字も書けないのですか・・・」

「一応、7度程書き直させたのですが、次第に文字が大きくなつてズルをするのでこれで妥協しました」

「それで、そのジャンは？まだ寝てますか？」

「いえ・・・“アレ”です」

後頭部まで背凭れのある革張りのオフィスチェアにゆったりと座り、アヴリルの記した報告書に視線を落としていたノルは「アレ」

という暗号めいた一言に、両手を腹の前で揃えて立っている彼女を見上げる。

「アレ？・・・ああ、アレですか」

「はい。今朝早くに出て行きました」

「こういう時だけは、早起きさんなんですよね・・・」

「珈琲でも煎れましょうか」

「お願いします。アヴリルのように、ジャンも気の利いた一面でもあれば良いのですが」

「無理な話ですね」と一度キッチンまでアヴリルは下がる為、一礼した。ぱたんと静かにドアが閉まったと、読まないとぞんざいに扱っていた、ジャンヴィエの報告書を取り上げ、頬杖ついたままその解読に取り組む。

相変わらず芸術かと思紛う書体。アヴリルに文句を言いながらも、書き直したことだけは素直に褒めてやった。以前は椅子にじっと座っていることすら困難で、背凭れに縛り上げて書かせていたのだから。

「アレ、か・・・。律儀で、お馬鹿な子ですね」

机の上に鎮座するチョーカー。ノルがこんなことをするのは彼くらいだ。他の者では意味がない。どうせなら付けて行って欲しかったと願うが、それを言ってしまうえばジャンヴィエは昨日の比ではないくらい激昂するのだろう。

「よお、ニール・アルフォード」

閑静な住宅街の人目につかない一角。家々の影になり常に薄暗い場所。人は通りたがらないが、ちょっとしたショートカットになるので、ニールは度々この小さな道を使っていた。

今朝は、防犯カメラの死角になっている一角に男が立ち塞がっていた。自分を見るなり知るはずもないその名を呼んで。

「えっと・・・、どちら様ですか？」

あの三人組とはまた違ったタイプの不良だ。待つ間に吸っていたと思われる踏み潰された煙草の吸殻が足元に幾つか落ちており、今も煙をあげるそれが骨張った長い指に挟まれている。

「どちら様だ？てめえが雇ったんだろうが、餓鬼」

「お前だつてぼくと同じくらいの年じゃないか」と出掛かった言葉を飲み込み、ニールは男の言うことにハツとする。「まさか」と表情に表れた反応に、ジャンヴィエはずっと服のポケットに突っ込んでいた左の握り拳を差し出した。

「手、出せ」

言われるままニールは彼の拳の下で何かを受けるように両手を差し出す。ぱつと開かれた手から落ちて来たものを理解するのに、その時間はかからなかった。

「うつ、」

「でけえ声出すなよ、ぼけ」

全身に力が入り咽喉を鳴らしたニールの口を左手で塞ぐ。衝撃で彼は通りの壁に後頭部を打ち付けたが、丁度良いのでそのまま押し付けることにした。

「依頼完了。それはてめえが殺した三人のもんだ。よく見とけ馬鹿餓鬼、これがてめえらを殺した奴だ」

最後の一言はニールの手の中にある三つのくすんだ眼球に話し掛けた。尤も、持ち主はもうこの世にはいないので、聞こえているはずもないのだろうが。

あまり褒められたことではないが、ジャンヴィエは仕事が終わるといつもこうして依頼主の元を訪れ、自分が殴り殺した者の眼を渡す。「殺したのはコイツだよく見とけ」と添えて。

「覚えとけ、ニール・アルフォード。俺らをこき使ったてめえが、まともな人生送れると思うな」

「ぼ、ぼくはあつ」

「いろいろ事情あんだろうけど、俺らを頼った時点で完全にお前も負け組だわ。まっ、また何かありやうちに来いよ。俺お前嫌いだけど、煙草代は自腹だしよ、うち小遣いねえからやべえんだわ」

言って煙草を爪先で揉み消し、ジャンヴィエは後ろ手を振りながら呑気に去っていく。その背中に「これどうしろっていうんだ」と悲鳴にも似た声が聞こえた気がしたが、そんなこと、彼の知ったこと

ではない。

01. Of Niel Alford, completed.

メイスンモワの創設者ノルがメンバーに課せたルールの中に「原則仕事は二人ないし三人で行う」というものがある。

もちろん彼らの身の安全の為でもあり、一部の者が勝手を仕出かさない為だ。そしてその組分けは随分昔にノルが行った。「相性占い」と本人は言っているが、ノルは雑誌の占いのコーナーすら信じないので信ぴょう性は薄い。

元々長い付き合いなので、メンバーは特に決められた相手との仕事を不服に思うことはなかった。それこそ正確が正反対とも思えるジヤンヴィエとアヴリルが良い例だ。

しかし、もちろん意思を持った生物なので、異を唱える者も一人だけいる。

「だから、合わないんだよ。キャラが違うしね。俺絶対あっちじゃないもん」

ノルの書斎に入り浸り、先ほどからソファーに寝転がって「あっち」「こっち」と指を差しながらシユースクは頭上にいるノルを見上げた。

仕事用のデスクで依頼の手紙を読んでいたノルは、ぐりぐりした目を自分に向けて意見を問う彼をちらりと見て、「そうですねえ」と適当に相槌を打つ。

「真面目でしょ、二人は。俺はチガウ。なんか仕事のやり方とかも

合わなくてさ、わかるでしょ？俺の性格考えたら。俺の意見なんてなーんも聞いてくれない。不完全燃焼なんですー」

ねえねえねえってば。また手紙ばかり読んで自分の話なんてちつとも聞いてなさそうなノルに、ソファアをばしばし叩いて主張した。ジャンヴィエと違うことは、シュースクは可愛げがある。幼さのような小動物のような、構って欲しそうなそんな目をして、今もうつ伏せに体勢を変えて仕事中のノルをじつと見つめた。

「ノル聞いてんのー？」

「聞いていますよ、一字一句間違わず復唱してあげましょうか？」

「良いよ、別に。聞いているならそれで」

まるで洗練された返答に、シュースクはムツとした。への字口になり、先ほど以上にソファアをばしばし力強く叩く。殴ると行った方が正確かもしれない。

お気に入りのソファアが非情な八つ当たりを受け「嗚呼」と眉を下げてノルが嘆いた。

このままではソファアの破壊は免れそうにない。急ピッチでシュースクの御眼鏡に適う依頼を、この紙の山から発掘しなければいけないのかと思うと、気が遠退きそうだった。

しかしふと手にしていた手紙に視線を走らせ、彼はつくづく運の良い子だと口元に子を描く。

「シュースク、あなたが好きそうな依頼がありましたよ。お一人で行きなさいな」

ずっと紙を宙に投げると、飛行機でもないのに空を斬り裂いて、ソファァーで仰向けに転がるシュースクの顔面に被さるように着地した。ぺらりと紙を摘み上げ、直筆ではなく味気のない電子文字が並ぶその紙の文面を見て、シュースクは仕方なさそうに立ち上がる。

「おや、不服ですか？」

「べつにつに……でもこの手の依頼って、ハズレだと最悪なんだよねえ……」

「あなたに限ってハズレなんて引くわけないでしょう？」

「まあ、そうなんだケド……」

歯切れの悪い物言いに、ノルは何かを企んでいるような笑みを浮かべた。

「嫌ならマーシュに回しますよ。ああ、でも彼はあまり好まない依頼でしょうから、ジャンかウットにでも」

「俺が行く！これ逃したら次いつ来るかわかんないし！じゃ、ありがとノル！」

他のメンバーが空いているのか、内線専用の電話の受話器を挙げ、マーシュの部屋の番号をプッシュしそうになれば、シュースクは両手を振りながら騒々しく依頼の手紙を持って出て行った。

してやったつり、というかようやく煩いのがいなくなり、ノルは溜め息と共に受話器を置く。マーシュに電話をするつもりがなかったのは、言わずもがな。

ウットとジャンヴィエの名を出すだけで、ああも単純な反応を見せるシュースクの幼さに思い出し笑いを零し、次の手紙を開封する。

しかし、依頼の内容と同封された写真数枚を見て、猫背がちになっていた姿勢を正す。

シュースクが持つて行ってしまったので、先ほどの依頼が書かれた手紙が原本ごとないのだが、側に置かれていた便箋を引っ掴み、今読んでいた手紙をそれを見比べる。

「おやあ・・・？」

この国で同姓同名の人物がいるのはそう珍しいことではないらしい。それは長年この地に住み付くノルが知っている。

数回瞬きを繰り返して、大きな眼鏡を外して眼前で見ても、その文字は変わらない。

「不思議なこともあるんだな。シュースクの悪運の強さ、か・・・？」

少し冷めた目をして、電話の受話器を再び上げる。今度はボタンの寸前で手を止めたりはしない。しかしダイヤルした番号は、マーシユの部屋の番号である「03」ではなく、「08」。

「ウット・・・今起きました？夜遊びはいけませんと、先日ジャンヴィエの馬鹿にあればと言っておいたはずなんですけどね・・・。まあ良いです。お仕事ですよ」

呼べばすぐに来てくれた。いつもは呼んでも当人が部屋にいることは少ない。しかしこれもシュースクが関わっていることによる、強運か。

だらしない草臥れたＴシャツとスウェット姿のまま、ウットはまどろむ目をごしごし擦りながら、ノックはせず、夢遊病患者のようにふらつと書斎に現れた。

手元の灰皿で殴って「顔を洗って来い」と言いたくなる衝動を抑え、ノルは手紙をウットに渡す。

「な、に・・・」

「仕事です、と言ったでしょう？」

「俺昨日も仕事でユーリが野菜作ってるから深夜ドラマ見れなくてさあスロットのメダルが明後日の方向に」

「ウット」

だらだらと意味不明なことを喋り続けるウットは、どう見てもまだ半分夢の中。

ノルの低い囁きで、ようやくここが何処で自分が何をしに来たのか思い出したのか、しまったと表情を強張らせた。

「起きてます」

「当たり前です」

溜め息を吐くと同時に、ずきずき痛む米神を押さえた。ウットは先ほどまでシューズが土足で転がっていたソファアに裸足で上がり、そこに体育座りをして依頼文を読む。

傍らにはまるで監視のように腕を組んだノルが立った。

全て読み終え、ウットはそのノルを見上げる。

「俺一人？」

「ええ、一人です。少々、複雑な依頼です。ユーリのいないあなたでは些か不安が残りますが、やってくれますか？」

「俺ユーリがいなくても大丈夫だよ」

「そうですか。では、お願いします」

子供のようなたどたどしい独特の口調がウットの標準。話の終わりを悟り、よいしょとおじさんのような掛け声と共に腰を上げ、寝ていたせいで縮こまった体を伸ばしながら、書斎の出口へと向かった。

しかしドアノブに手を掛けたもののウットは中々出て行かない。動かずに視線だけでウットを見送っていたノルは首を傾げ、フリーズしたその名を呼ぶ。

「ウット？」

「ノル、怒ってる」

馬鹿な子ほど可愛い。阿呆の子ほど可愛くない。

ノルの経験上の確言である。

一度振り返って子供らしい表情を変えずにそう言ったウットの顔を、凝視した。

「一体、なんの話だ？」

「俺ノルのこと好きだからわかるよ。怒っていると腕を組んでちょ

「っただけいつもより人をじろじろ見るんだよ。声も少しだけ暗いしねえ」

「まるで五感の発達したユーリのようなことを言うんですね」

「そんなことないよ。ユーリはもっとよく知ってるよ。ノル以外の人たちの些細な変化も」

へらへら笑うウツトは全く可愛くない。ジャンヴィエのように反抗期でもなく、どちらかと言えば親に褒められたいが為に良い子にする子のように、ノルにとっては非常に話易い相手。

時々、腹の立つほど可愛げがなくなる。今がまさにそう。

「俺にさせるってことは、この人どうなっても知らないよお？」

「ええ、構いません。だからお前を呼んだのだよ」

もう不機嫌を隠すことはしない。重く低く響いたノルの声に、表情を崩さず「そ」と短く返事をして、ウツトはスウェットの裾を引き摺りながら出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2412ba/>

meis-mois

2012年1月9日21時57分発行